

唐物の流通と消費

関 周一

Distribution and Consumption of Karumono (Foreign Goods)

はじめに

- ① 唐物の輸入
- ② 京都における唐物の消費
- ③ 鳥津氏・大内氏による唐物贈与
- ④ 博多・鎌倉における唐物
おわりに

【論文要旨】

本稿は、中世における都市の流通・消費を考える一環として、唐物の流通と消費を考察するものである。特に一五～一六世紀前半の京都を中心に検討する。

一五～一六世紀前半、宋商船や、寺社造営料唐船や遣明船などを通じて、中国大陆から京都に唐物が流入した。一五世紀には朝鮮王朝との貿易も開始され、特に同世紀前半には、明・朝鮮王朝・琉球王国の使節が京都を訪れて唐物をもたらし、唐物流入のピークを迎えた。

京都における唐物消費の事例としては、宴や儀式・法要の室礼や法会の捧物があげられる。贈答品の中にも唐物はみられ、天皇・院・足利将軍が臣下らに下賜する場合や、八朝のような年中行事において贈答される場合があった。贈答品の中には、伝世品も含まれていた。

一五～一六世紀には、独自に貿易を行っていた鳥津氏・大内氏から京都に唐物が

もたらされた。鳥津氏が、将軍・公家に対して、琉球王国・朝鮮王朝から入手した唐物を積極的に進上したのに対して、大内氏の唐物進上は、概ね、天皇・公家に対しては太刀・銭を基本としていた。また贈答品を流用・循環する事例もある。

一五世紀後半、京都における唐物流入が減少するのにあわせて、武家の贈答品は太刀・銭などにはほぼ固定する傾向にみられるようになり、唐物の占める比重は小さくなった。

また貿易の拠点であった博多における贈答品の中には、唐筵・高麗木綿・胡椒などがみられた。鎌倉は、一四世紀前半、唐物ブームを迎えていたが、一五世紀以後も贈答などによって唐物がもたらされたと推測される。